

大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」
報告書

松下竜一の運動の展開をめぐる葛藤
——イギリス・グリーンナムコモンにおける女性たちによる運動との関わりから——

大阪大学文学研究科
堀川弘美
Kumanomipuka[at]gmail.com

I 調査の趣旨と目的

大分県中津市出身の作家松下竜一の運動を研究する中で、グリーンナムでの女性たちの運動を調査する必要があると判断した。松下竜一は 1937 年に生まれ、2004 年に亡くなった。非常に身体が弱く、特に肺に大きな欠陥があり、常に病と隣り合わせで生きていたことが一つの特徴とも言える。また経済的貧困も彼の特徴と言える。これらの理由から、大学進学を志望していたが、断念し、家業の豆腐屋を継いだ。しかし、1970 年に豆腐屋を廃業し、著述活動を始める。その一つの契機となったのが、大分県臼杵市にある風成という地区で起こった女性による、猛烈なセメント工場建設反対闘争を取材したことであった。

風成という地域は、男たちが突きん棒漁という方法で漁をするため、長期に亘り遠洋に出る。そのため、男が不在となる期間が非常に長い。地区の消防団も女たちだけで訓練をし、成り立っていた。その地区にセメント工場建設案が浮上した際、隣接する津久見市がセメント工場を建設したことで、子供の喘息が急増し、砂降る町へと化すなど、被害が多く出ている様子を見てきた人達の一部は、反対運動へと突き進んだ。このとき松下が描いた闘う女たちの姿は、その後の松下の運動に大きな影響を与えたと考えている。

日本においても 1980 年代後半から、女性が主体となった草の根市民運動が展開し始める。特に、反核運動においてそれは顕著であったと言えるだろう。松下が、1973 年から 30 年以上に亘り、編集、発行した『草の根通信』という月刊誌がある。この中でも、各地で繰り広げられる女性たちの運動に紙面の多くが割かれていた。グリーンナムの女たちの反核ミサイル運動のこともまた、同時代に取り上げられている。松下は、生涯、中津市に住み続け、住む場所で運動することにこだわっていた。海外のことに触れたものは非常に少ないと言える。

ほぼ同時期に起こっているこれらの女たちの運動とはいかなるものであったのか、また社会的にどのように見られていたのか、どのように意味付与されていたのか、松下の目線を媒介としながらも、そこから一歩外れてこの運動をみたいと考えた。その上で、松下がこの運動に何をみたのか、女たちの運動に送った松下の熱い眼差しを、私なりに言葉にするために現地へ行った。

II 調査期間 2010 年 9 月 17 日—10 月 16 日 30 日間

調査地 イギリス（グリーンナムコモンピースキャンプ跡地、ロンドン、大英図書館）

調査内容 ピースキャンプ跡地での聞き取り、キャンプ経験者へのインタビュー、図書館での資料収集

1. ゲート跡を辿る

ロンドンから電車で約一時間のところにニューベリーという地域がある。NATO 決定によって、1983 年末からヨーロッパに地上配備巡航ミサイル 464 基が配備されることになり、ニューベリーになるグリーンナムコモン米軍基地には 96 基（後に 101 基に増える）の核ミサイルが配備されることになった。この決定は、イギリスをはじめヨーロッパ中で激しい反対運動をひき起こし、83 年にはヨーロッパの「熱い秋」と呼ばれた数百万のデモを招いた。1981 年にスカンジナビア半島からパリまで、広島・長崎デモの平和行進をした女性たちの話を聞き、サウスウェールズの女性たちはグリーンナムコモンまでの平和行進を企画し、カーディフからグリーンナムコモンまでの約 200 キロを歩いた。1981 年 9 月に一行が到着し、ピースキャンプがスタートした。図 1 は、ピースキャンプが行われた際の図である。9 つのゲートに色の名前が付けられ、個性を持ちながら運動を展開した。南側の①の Yellow Gate がメインで、運動もまたラディカルなものだったという。私が今回、インタビューを行った人達の多くは Blue gate に行っていた。レズビアンが多いゲートだったという。

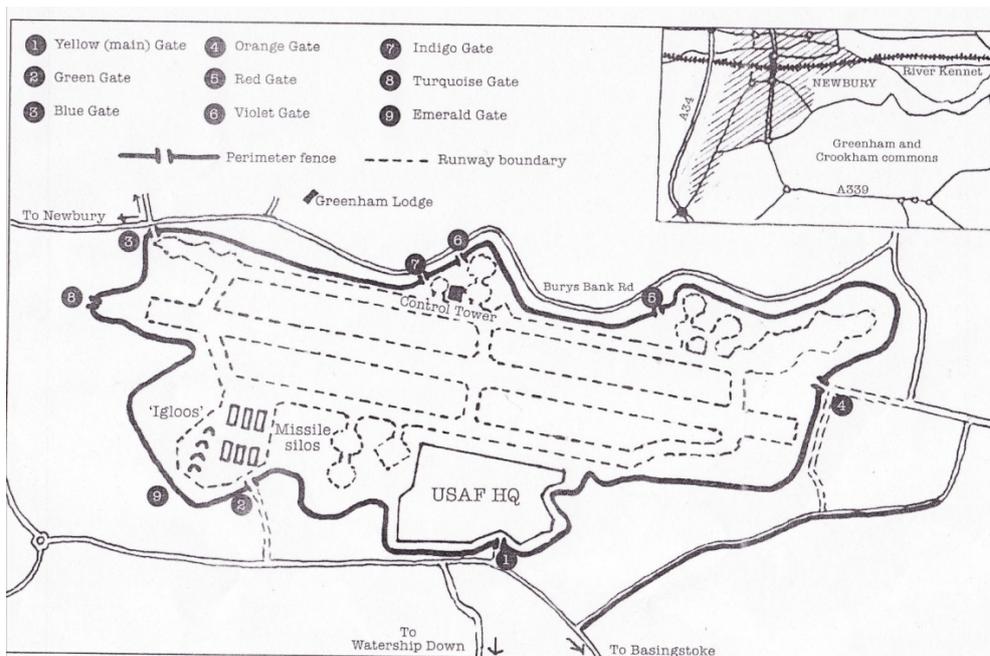


図 1 DAVID FAIRHALL “Common Ground The story of greenham”より

写真 1 は、私が撮影したもので、⑥のゲートに立てられていた看板である。グリーンナムを一度目に訪問した際、私はニューベリーの駅からバスを乗り継いで New Greenham Park へ行った。それは、図 1 の南側にある USAF HQ と書かれている箇所、下の写真 1 でいうと、下側の真ん中 3 分の 1 の色の異なる箇所である。ここは、現在 Industrial park となっている。サイロなどがあることから分かるように、この元米軍基地は広大である。車なしでは、見るのに限界があると感じ、二度目の訪問時にレンタカーをして全体を見て回った。



写真 1

2. 人々の反応

二度目の訪問時に、9 人の人にピースキャンプのことを知っているか、何か記念碑とか博物館のようなものがあるかを尋ねた。一人目はニューベリー駅周辺（写真 2）を歩いていた女性、もう一人はその駅周辺でチャリティショップを営む男性、三人目は Industrial Park のセキュリティゲートの管理人の男性、四人目は山奥にある②ゲートに行ったときにたまたま出会った警察官、五、六人目は Industrial park 内にある劇場のようなホールでオーケストラのリハーサルをしていた人男性ふたり。七、八人目はその近くを歩いていた女性二人。9 人目は③ゲート内で犬と子供と遊んでいた男性。以上の 9 人である。



写真 2 ニューベリー駅周辺

ピースキャンプは1991年に最後の巡航ミサイルが撤退して以降、縮小し、キャンプを終了していく。最終的にメインの Yellow Gate が2000年に閉じられる。地元でどのようにこのキャンプが認識されていたのか、これらのインタビューだけで想像することは難しい。しかし、それほど前の運動でもないにもかかわらず、認識度合いは低かったと言える。「聞いたことはあるけど、良く知らない」という答えや、曖昧な情報が多く、現在はそこでくらはしてはいるものの、自分の足でその場所を歩いたことはないようであった。

最初に声をかけた女性は、「良く知らないが、博物館の中に何かそれに関する展示があるかも」と博物館を教えてくれたが、4年間程閉館されている博物館（写真2）だった。（私が訪ねた翌月からリニューアルオープンすると紙が貼ってあった。）チャリティショップの男性は、「サイロだけが売れずに残っていて、その中が展示館のようになっていると聞いたことがある。」と言っていたが、私があるいて探した限り、なかったようである。



写真2



写真3

写真3は、①のメインゲートから出て、30メートルくらいのところにひっそりと立っている看板である。この中に小さな庭があり、写真4のようになっている。



写真4

セキュリティの管理人がいたところから見えないが、ほんの数十メートルの距離である。3回訪ねたが、このピースガーデンのことを教えてくれなかった。彼に関して言えば、ピースキャンプの話を決して快く思っていないことが表情から見てとれた。このガーデンの存在を教えてくれたのは、②ゲートで会った警察官だった。また②ゲートからはサイロらしきものが見えるが、あれがサイロか確認したが、「違う。サイロはもうここにはない。」(写真5)とその警察官は明言した。しかしロンドンに戻り、当時、ピースキャンプに加わっていた女性たちに確認したところ、「これはサイロだ」と言われた。



写真 5

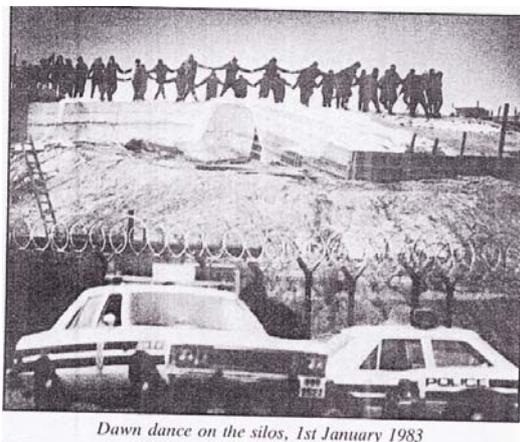


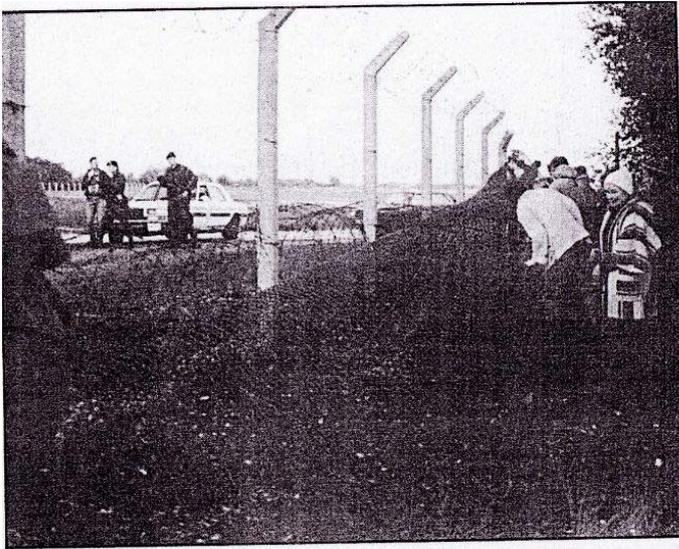
写真 6 サイロの上で踊る人達



December 12th - encircling the base



'I can't find the instructions for unwinding this, gov.' Sewage pipes action, 5 October 1982



Taking down the barriers - 29 October 1983

フェンスを切ってはがしているところ。

3 マイル以上フェンスを取り払った。

他の7人に関しては、良心的に感じてくれた印象があるが、その多くが不確かで曖昧な話であった。ロンドンでグリーンナムへ行く派遣事務所ができ、ローテーションを組んだり、全国から数千人が足を運び、キャンプを張ったり、何かあれば数万人集まったりした運動であったが、それを地元がどのように見ていたかは、今回は十分には把握できなかった。

3. 資料から

新聞 (THE TIMES) では、ピースキャンプ内で警察の介入があり、逮捕が多くなされた際に、記事となっている場合が多かった。時折、一人の女性に焦点を当てた記事があるが、80年代前半に集中しているように見受けられた。テレビで特集されたこともあったようである。反響があったのかどうか、調べるができなかったが、私が確認できただけで、2回再放送されていた。これもまた80年代前半のことである。

またピースキャンプに加わっていた人達が出版した本、その後論じられるようになって出された本があり、その中から女性たちの当時の声を集めてみた。「抽象的な言葉を具体的なものに、非人間的なことを人間的なことに替えることが重要です。」というような主張がグリーンナムでなされて来た。繰り返されるこれらの主張を読む中で、風成の女性たち

もまた、政治を行うものたちに、「そげな難しいことばを使われても分からん。自分達に分かるように説明せい。」という主張を繰り返したことが想起された。

たとえば、政府は『二十鍵管理〔巡航ミサイルの核ボタンにスイッチを入れる鍵を、米国だけでなく英国も持ち、二つの鍵で管理するという。巡航ミサイルに関する論議が強まって注目を集めた論議で、米国だけがカギを持つことは、英国の頭越しにミサイルが発射され、核戦争に巻き込まれるとし、英国もミサイルの鍵をもつよう主張する意見が出てきた〕』とか、いかに『巡航ミサイルがソ連の SS20 に対する回答』かなど、婉曲的な論議ばかりをしているので、奇妙なことに、何百万もの人々の死について語っているのだという現実感覚が薄れていきます。

この現実感覚の薄れ、それを取り戻しながら運動する、という点において、松下は興味が魅かれたのだと考えている。先日、「私達の税金はもっと軍事に使われるべきだ。」と述べる男性がいた。彼は自らが兵士となることや、戦場へ行くことは想定していない。彼の話に強い違和感を覚えたのは、その場合、命が失われることになるという現実を彼が認識していないかのように見えた点だった。

このキャンプの手記を読む中で、生活の中において現実感覚を持って、政治を語る運動が営まれた場所であった、と理解した。「誰もが考えていることを話せる機会があるということが重要」だとたびたび強調されている。政治目標達成へと前進する運動と同時に、運動内部で（各ゲート内でも、ゲート同士でも）対立し、葛藤が起こり、関係を変容させ、紡ぎ直しを絶え間なく行うという運動を営んでいっている様子が手記から読みとれた。

非暴力を貫いたこともまた、「話せる場」を作ろうとする中で生まれた発端であった。「非暴力とは、たんに暴力がないという戦術ではなくて、目的とする理想と同時に変化への戦略、つまり生き方のありようすべてといえましょう。」とあるように、「目的とする理想」をそれぞれが言葉にすることに焦点が当てられていたと言える。「非暴力には、想像力と決意の強さにもとづいた、感情、考え方や究極的には肉体などという、私達が唯一もっている本物の宝物から、力が出てくるという考え方があります。私達はみんな、お互いの知識や特技を信頼し合っているので、他の人以上の力をもつ必要などありません。」違いを尊重し、信頼を築くということも繰り返し語られている。実際に信頼関係を築くことは非常に困難であったようであるが、しかし、これもまた「目的とする理想」を語り合った中で出てきた言葉だと考えられるのである。

4. グリーナムピースキャンプを経た人たちの今

グリーナムのピースキャンプを経験した人達は、今どこで何をしているのか、可能な限り会って話をききたいと考えていた。どうしても現在も何か運動に最初は、Rebecca Johnson さんと連絡を取った。彼女は、現在、トライデント・ブラウシェアズというトライデント核ミサイル廃絶運動の主要メンバーであり、またグリーナムコモンに隣接するオルダーマストンの核兵器工場でのキャンプのメンバー、Women in black のメンバーでもあり、イギリス北部の再処理工場周辺での運動、被害者支援などもしている活動家である。大学でセミナーをしたり、国連でのロビイング活動をしたりと、忙しく活動中である。

Women in black の人々は 90 年代初めから、トラファルガー広場の隣で毎週水曜日にメッセージを書いたボードをもち、約一時間立つ、という運動を続けてきた人達である。彼女たちの多くもグリーンナムのピースキャンプ経験者である。今回、もっとも時間を割いていただき、当時のことを思い出しながら語ってくださった方々である。4 回彼女たちの行動に同行させていただいたが、常に言語が不十分な私への配慮をして下さり、またメンバーの誕生日をささやかながら祝いあったり、足の悪い方へ椅子を持ってこられたり、笑顔の絶えない温かな雰囲気であった。



グエン・カークさんは、現在アメリカに行かれており、今回お会いすることは叶わなかった。このピースキャンプのことを本として出版され、それは日本語に翻訳もされている。“the East Asia-US-Puerto Rico Women’s Network Against Militarism” の創始者のひとりで、現在も活動中である。彼女の主催する会議の進め方が非常に印象に残っていたのだが、今回、グリーンナムピースキャンプのことを知る中で、ここで培われた関係生成の経験、議論の経験が彼女の運動を形作る一要素となっていると感じた。会議中の食事への配慮、言語の問題に配慮し、会議の進行が滞ったとしても、楽しめていない人がいるならば、雰囲気を変えるために様々なレクリエーションを取り入れるなどして、会議を進めていた。

5. 今後の課題と展望

運動を進める中での「配慮」や「思いやり」を重視する姿勢は、日本でも 70 年代以降、草の根市民運動において見られるようになってきていると考えている。ピースキャンプの濃密な時間を経た女性たちの今をさらに探求することで、運動におけるもう一つの領域が浮かび上がってくるだろうと考えている。

参考・引用文献

Barbara Harford & Sarah Hopkins, eds “GREENHAM COMMON: WOMEN AT THE WIRE”
BETH JUNOR “GREENHAM COMMON WOMEN’S PEACE CAMP: A HISTORY OF NON-VIOLENT RESISTANCE 1984-1995”

DAVID FAIRHALL “Common Ground The story of Greenham”

グリーナムの女たち著 近藤和子訳+解説『グリーナムの女たちの闘い 核ミサイルを止めた十年』オリジン出版センター1992年

アリス・クック グウィン・カーク著 近藤和子訳『グリーナムの女たち 核のない世界をめざして』八月書館 1984年

『トライ・デンティング・イット・ハンドブック トライデント・プラウシェアズ公開手引き書』2001年（日本語版2004年）